柏樹

題字
南　勇　会長
川口市退職校長会
会報　第２８号
令和６年２月１日

植物の雑学あれこれ

森山征夫

一　花が沢山咲く種類はまめに摘む

ペチュニアやパンジーといった花が沢山咲く種類は、咲き終わった花をまめに摘み取ると、花が長く咲くそうです。

この種類は、種の保存のためにタネを沢山作ろうとして、花を咲かせるのだそうです。タネができるともう大丈夫だと、花の仕事は達成されたと指令が出るそうです。それで、花は咲かなくなるとのことです。

二　毒

先ごろ、蕁麻疹の発症らしき症状が出ました。何を食べたのかと考えていたところ、数日前にハゼの伐採をしたのを思い出し、家族は、切るたびにかぶれていた話を思い出しました。

田舎育ちの自分は、ウルシなどには耐性があると思い込んでいて、素手で伐採しました。そのためにかぶれてしまったようです。

木には、いろいろ毒をもったものがあります。かつて高速道路わきによく植えられたキョウチクトウも、切り口からの樹液に毒があるといわれています。

木に限らず、植物は本来毒をもっているそうです。身近な草花のスズラン、スイセン、ダリヤなど沢山あります。

野菜は、人間が植物の毒との戦いによって手に入れた成果だそうです。ジャガイモの芽は毒だということはよく知られています。また、猫にはネギ類はだめだと聞きます。食べられるキノコと毒キノコのように、長い試行錯誤を経て、人間が手に入れた今の野菜があるのだそうです。

三　向日葵の花は太陽を追って動く？

ヒマワリは花を咲かせる前の成長期に、太陽の方向を向いて動きます。また、食虫植物の動きも不思議です。

四　切られると音を出す

イスラエルの研究で、木は切られると音を発するそうです。これが、鳥や虫に聞こえているのではとのことです。動物と同じように、切られると叫んでいるのでしょうか？

想い出

加藤行雄

中学校に勤めていた時のことである。科学部の顧問の先生が転勤してしまった。この先生は、ミツバチの研究の指導では定評があり、数々の業績を残された方であった。同じ理科の教師として私が顧問に指名された。だが、ミツバチについては全くの門外漢で固辞したが、他に適当な人はなくやむを得ず引き受けた。

部員達は、特に3年生は、ミツバチについて極めてよく知っていて、彼らから教わりながら何とか顧問を務めていた。だが、素直で真面目な部員達であったが、日々の学校生活では自信のなさのようなものを感じていた。

当時の人気の部活動は球技で、野球やバスケやバレーは入部希望者があとをたたなかった。科学部はといえば、科学展等で表彰されても、生徒達の反応は運動部が表彰される時とはだいぶ違っていた。部員の中には、運動を苦手とする生徒がかなりいて、それが自信のなさにつながっているのではないかと思えてならなかった。

いろいろ考えたあげく、私がやっていた合気道を部員達と一緒にやれないだろうかと思い立った。合気道は試合はなく、型の妙技を競う武道で、個々の体力に合わせて出来るので、彼らにもやれるのではないかと考えた。女子部員もいたが、幸いにも、学生時代に合気道をやっていた新任の女子教師が赴任してきたので、その先生にもお願いした。そして、校長と柔道部の了承を得て、生徒達と部活の合間に柔道場で合気道を始めたのである。

素直で真面目な生徒達は見る見る上達していった。時折、バスケ部やバレー部の生徒達が、合気道の教えを請いに来たが、『科学部に入部したら喜んで教えてあげる。』と丁寧に断った。

部活動も順調に進み、市の科学展はもとより、県大会での入賞も果たした。全校集会で校長から表彰を受ける部員達は、以前とは違い自信に満ちているようだった。生徒たちの反応も温かく、大きな拍手が耳から離れなかった。

これは、中学校の教師を始めた頃の想い出である。生徒の持っている可能性について改めて気付かされた瞬間であった。

― ちょっといい話 ―

授業でのひとこま

久保田真一

退職後縁あって、大学で理科教育の授業に携わっている。今年で4年目になる。将来、小中学校の教員を目指す学生たちと一緒に理科について学ぶ機会を得た。大変真面目な学生たちが多く、将来が楽しみである。

私は、最初の授業で、学生たちに必ず聞くことがある。それは、「みなさんは、理科が好きですか、嫌いですか、その理由は何ですか？」と一人一人に聞いている。「好き」と答える学生は5割、「嫌い」と答える学生が5割である。その中には、小学校の頃は、大好きだったが学年が進むに連れ、嫌いになってしまったという学生が意外に多い。小学生の頃、実験や観察が大好きで、いろいろなことを体験し楽しかったが、学年が上がるにつれて覚えることが多くなり理解できずに嫌いになってしまったという。

私は、この理科教育の授業では「自然を通して学ぶことを大切にして欲しい。」と言っている。例え、理科が苦手でも教える教師たちが「理科が楽しい」と思える授業を日々展開して欲しい。私たち教師の仕事は色々あるが、その中でも、①わからないことがわかるようにしてあげること、②その教科を好きにしてあげることを大切にして欲しい。例えば、小3理科の授業には「じしゃく」という単元がある。百円ショップで手軽に購入できるようになったネオジム磁石、かつて高価で購入できなかったが今では、すぐ手に入れることができる。このネオジム磁石にクレヨンはつきますか？と質問すると、「つかない」と学生たちは答える。「どうして」と尋ねると「鉄ではないから」と答える。「調べたことがあるの？」と聞くとその経験はない。実際、学生に実験させてみると、なんとこげ茶のクレヨンだけがつく。学生たちは目を丸くして、みんな驚いている。学生たちにとって新たな発見である。この「驚きと感動」を授業の中で大切にして欲しい。

また、授業では、自分の考えを理由や根拠をもって言えることを大切にしている。私は、学生たちが自分の考えを発言するとたくさん称賛する。発言したことを認め、称賛する場面を大切にしている。「子どもは、褒められるために学校に来ている。」学習意欲は称賛されることで育まれるものであり、そのよさを認め、伸ばしてあげることが教師の役目だと日々痛感している。

これから教師になる学生たちが一人でも子どもたちの理科好き、学習好きを育んでもらえたらと願う。

時間の速さと社会の変化

木村達夫

退職してから3年が過ぎようとしています。私は現在、大学の事務職員としてフルタイムで働いています。業務は主に学生の生活支援に関することで、退職前までの仕事とは随分かけ離れています。新しいことばかりで戸惑うことも多い毎日ですが、大学の教員や学生との触れ合いの中で、私が日々感じ、考えていることについて、いくつかの要点を紹介したいと思います。

一、時間の速さ

時が経つのは早いと言いますが、その速さは退職後尚更、実感しています。3年という期間が、あっという間に過ぎ去り、年月が飛ぶように経過していくことに戸惑います。子供の頃、長い夏休みは永遠に続くと感じましたが、大人になると、一瞬のように過ぎ去ります。この速さに恐れおののくこともありますが、同時に、大切な瞬間をより意識的に楽しもうと思っています。家族や友人との時間、自分を成長させる機会、そして海外も含めた自然とのつながりを大切にし、感謝の気持ちを忘れずに過ごすよう心掛けています。

二、社会の変化

現代社会は急速に進化しており、技術の革新が私たちの生活を根底から変えています。この変化に対応することは不可欠ですが、自分自身がそれに追い付いていない焦りも感じています。関係ないと切り捨てるのは簡単ですが、しっかり考えて判断していこうと思っています。

同時に、伝統や文化を守り、尊重することも忘れてはなりません。新しいものに魅了される一方で、過去の遺産を尊重し、受け継ぐことが私たちのアイデンティティを形成します。未来への道を切り開くには、この新旧のバランスを取ることが肝要です。

三、小さな幸せ

最後に、大きな目標の達成や成功は素晴らしいことですが、同時に、日常の中に散らばる小さな幸せに喜びを感じることも大切です。朝のコーヒーの香り、友人との笑顔のひととき、静かな読書時間など、これらの瞬間が私たちの生活に豊かさをもたらします。日常の喧騒のなかでも、これらの小さな幸せに気づくことが、より満足のいく人生を築く手助けになることを実感しています。

日々の思索や感情が、私たちの生活をより深く豊かにするキーであると信じています。時間の速さと社会の変化に立ち向かう中で、小さな幸せを感じ感謝することが、私自身の成長を支えています。退職校長会の皆様も、日常の中で自身の小さな幸せを見つけ、より豊かな人生を築いていかれることを願っています。

❖日々雑感❖

初心

佐藤利幸

断捨離中、懐かしい物が出てきました。採用通知です。それは、埼玉県の教員採用試験に合格し、川口に採用が決まったことを知らせるものでした。

あの頃、故郷福島の教員採用は望めない状況でしたので、迷うことなく、高校の頃から夢見てきた教員になれる知らせはこの上ない喜びでした。

初めて川口を訪れたのは面接の時です。その採用通知を携え、東京の下宿先から赤羽線を乗り継ぎ、荒川の鉄橋を渡ります。煙棚引くキューポラが眼前に迫ってきました。いよいよ川口。「どんなドラマが待っているのだろう。」これから自分が生きていく街に様々な思いを抱いて、川口駅に降り立ちました。すると、焦げ臭い乾いた匂いに気付きました。

「これが鋳物の街の匂いか…」

私の初めての川口でした。

「自分はこの街で教師になる。」

武者震いするような鳥肌が立つようなそんな気持ちとともに、独り立ちすることへの感傷も心のどこかにあったように思います。

あれから45年。自分は、すっかり埼玉の人間になっていました。定年退職後、心の余裕が出てきたからでしょうか、いろいろな物に眼がとまります。そして、その都度、様々な記憶が甦ってきます。それもこれも川口との出会いがあったからこそです。自分が憧れていた教育の世界に道を拓いてくれたこの埼玉・川口との出会いには運命を感じます。そして、この埼玉での45年間の歳月とその中での多くの人との出会いが、この人生を彩り豊かにしてくれているように思います。

思いを巡らせているうちに気付いたことがあります。川口駅に独り降り立ったあの日は、故郷に別れを告げ埼玉に根を下ろすことを決断した日だったのだと思います。赤茶けたこの採用通知を見ていると、遠い昔の若かった自分とあの砂の焼けた匂いとが、懐かしく思い出されます。あの時の教師になることへの純粋な決意と決して口には出さなかった故郷との別れの記憶が甦ってくるのです。

あの時、自分の夢だった教員になることを選択し、それを全うできたことを今改めて思い返していると、実に感慨深く思います。自分が志したこの教育の世界を、いつまでも応援していきたいと思っています。

私が息子になった日

清水幹明

養父が他界した。認知症で自我を失った先の死だった。養父の人生を想う。

私は高卒で佐渡から上京。お盆と正月だけ帰省する大学時代。二十歳を過ぎたときだ。実家で父が言った。「お前を養子に欲しいという家がある」「その家は子どもが居ないで困っている」「このままだとその家は途絶える」「お前は次男」「お前もものが分かる歳」「よく考えてくれ」「嫌なら断ってもいい」

青天の霹靂。私はまだ青二才だった。見知らぬ人の息子になることがどういうことか想像できなかった。浅はかな想像力を巡らせていたら、次第に疑心が生じた。『俺はこの家に要らないのか』『俺が他人の家の息子になっても平気なのか』決して口にできない親への問いが心の中で激しく分子運動を繰り返した。

断る権利を私に委ねたことの意味を考えたとき、内臓が煮え始めた。『息子を愛しているなら相談などせず断ってくれればよかったのに』『俺に決めさせるなんて養子になっても構わないと半分言っているようなものじゃないか』

心が乱れたままに私は養子になった。その日から大きな責任と代償が生じた。

新しい親は過度に私に優しかったが、私の扱いに苦慮していた。よい親子を演じる年月が始まった。40年も。

養父の遺産は莫大だった。その広大な田や山林は全て私の名義に登記した。ただそれは誰も買い手がない負動産だった。荒廃し境界すら判別不能の土地もあった。いったい養父が守り継いできたものは何だったのか。

父よ。あなたは私が息子になって安心して人生を終えられたのか？墓前で聞くが答えはない。ただはっきり言えることがある。遺産相続をやり終えたとき、私はようやくこの家の息子になれた気がしたことだ。40年の苦悩が、そのとき深く強い覚悟に変化した。私はついにあなたの息子になれたのだ。

残された養母との関係も変わった。私は本心をさらけ出して母と話ができるようになった。一周忌を終えたある日、二人は喧嘩をした。口論になった。養子になって初めての事件だった。母は子どものような我儘で私に意地悪を言ったのだ。ついに私たちは親子になれたのだ。彼女はようやく私の母になれたことを感じたのだと思う。

養子に出させた親と、私を迎え入れた親。4人の親の遙かなる願いによって私は、青二才からついに成人となれた。ずいぶん時間がかかった。私の人生はようやくここから始まるのかもしれない。ただ・・佐渡の春はまだ遠い。

教育情報

「主体的・対話的に学習に取り組む生徒の育成」
～ＩＣＴ機器を活用した個別最適な学びと協働的な学びの実現～

川口市立岸川中学校
校長　松　田　隆　幸

1　はじめに

本校では令和４・５年度と川口市教育委員会「学力向上」に関する研究委嘱を受け、研究主題を「主体的・対話的に学習に取り組む生徒の育成～ＩＣＴ機器を活用した個別最適な学びと協働的な学びの実現～」と設定し、生徒の学力向上に取り組んでいる。

コロナ禍における分散登校期間よりリモート授業に取り組み、その後も、対面とオンラインを併用したハイブリッド授業のスタンダード化に成功するなどこれまでに実績を積み重ねてきた。そのときのＩＣＴ活用の経験とノウハウを基に、個別最適な学びと協働的な学びを、ＩＣＴを効果的に活用して実践していきたいというところから研究が始まった。はじめは授業での効果的な活用に苦しんだが、「やってみなはれ」を合言葉に現在も前進し続けている。

2　研究主題

主体的・対話的に学習に取り組む生徒の育成～ＩＣＴ機器を活用した個別最適な学びと協働的な学びの実現～

○本校の課題

(1) 学力の向上

①全国・県学調ともに平均を下回る。

②外部実力試験平均を下回る。

③自分に合った授業が行われていると感じている生徒は多い。

④友だちと協力したり自分と違う意見について考えたりすることを楽しいと思っている生徒が少ない。

(2) 不登校生徒数の削減

・市内でも不登校生徒数が多い現状が続いている。

○本校のストロングポイント

(1) ＩＣＴ機器が本校の課題解決に役に立つことを教員が理解し積極的に活用している。

(2) 話し合い活動の中で、意見を交換しながら自分の考えを深めることができることを生徒が理解している。

（全国・県学力調査質問紙より）

3　研究の実践

(1) 研究の進め方

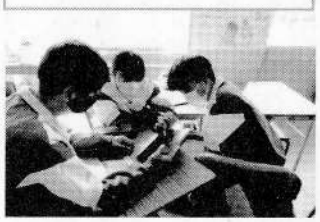
働き方改革が叫ばれる中、研究自体もＩＣＴ機器を活用し、教員の負担軽減をしながら研究を進めた。研究に関する教科会や各担当者等が自由に研究紀要を作成できるように、共有ファイルとして資料を編纂した。

(2) 研究実践

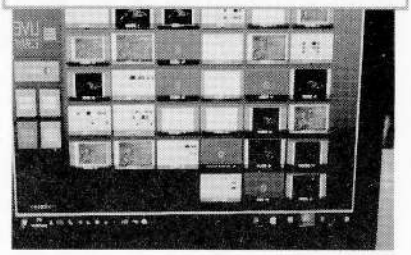
学力向上のターゲットゾーンを明確化した・個別最適な学び

下位層（偏差値35～45）に焦点を置き、個別最適な学びを積極的に導入した。（指導の個別化・学習の個性化として、小学校１年生に戻り、各自の躓き個所から学びなおすことができる）また、不登校生徒への学びの機会の提供についても、以前から行っているリモート授業により、チャットでの参加・音声だけ・顔を出しての参加が可能となり、多様な学びの提供を行っている。また、総合的な学習の時間では、卒業論文つくりとして、探究学習を取り入れ、生徒一人一人が自身でテーマを設定し、深く、個性的な学びを実践している。

協働的な学びの場面



大勢の生徒の意見を一覧できる機能



(3) コミュニケーションスキルも高める協働的な学び

学習者中心の授業の展開として、ＩＣＴ機器を活用することで、資料の配布や提示もすべてＩＣＴ機器の中で完結できるようになり、グループ内の意見の交換の時間をこれまで以上に多く確保できるようになった。

4　これまでの成果と課題

〈成　果〉

◎学力低位層の減少と上位層の増加が確認できた。（令和４年度）

◎学校訪問に向けて全職員がＩＣＴを活用した知識構成型ジグソー法の授業を試みたことで、オクリンクを使って効率よく意見を共有することができた。

◎教員アンケート

探究学習をＩＣＴに活用している項目が大幅に伸びた。

◎指導法の幅が拡大した。ＩＣＴ機器だけで、紙を一切使わない授業スタイルから、効果が見込める箇所にＩＣＴ機器を活用する授業スタイルまで、指導者側の授業スタイルに幅ができた。

〈課　題〉

●総合的な学習の時間等でＩＣＴを活用した遠隔地との交流などの体験的な学習の機会の充実を十分に図れていない。

5　今後の研究の取り組み計画

(1) ＩＣＴを活用した授業の一層の充実

（バリエーションを増やす）

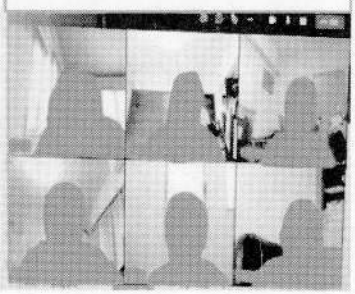
(2) 「個別最適な学び」の一層の充実

・低学力層を焦点化した学びの支援を拡充

(3) 取り組みの数値化と改善

・次回の県学力調査の結果が出るまで、取り組みを自己評価しづらいため、改善がしにくい→改善するためのデータの回収と活用

コンピュータ画面を使ったグループでの話し合い



川口市退職校長会ホームページ
kouchorpm.html.xdomain.jp
※ＱＲコード・ＵＲＬからご覧ください。

編集後記

会報「柏樹」第28号をお届けしますと共に玉稿を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

地球温暖化の影響か、春と秋が短く感じるとの声、季節を感じ取りながらの生活を大切にしたいものです。

（林　俊幸）